巻頭言

大学院の昨今

福井俊郎*

1953年は新制大学院が発足した年で，もう40年近く前のことになります。その年に，私は1回生として理学研究科の生物化学専攻に在学していました。その専攻に所属していたのは，6人の院生と4人の教授で，合わせて10人が赤堀先生の教授室で週1回の輪読をしていました。寺小屋のようで今もなつかしく思い出されます。その後これまでに，大阪大学は2万人の修士と1万人の博士を世に送り出しました。しかしながら，大学院独自の設備や教室，事務組織が無いということにかけては，発足当初とほとんど変わっていません。すべて学部におぶさって来たわけで，劣悪な条件下にあります。一方，この40年の間にわが国を含む世界の科学・技術は大発展を遂げました。大学院における研究教育の質的向上と量的増大とが，今やもっとも強く要求されています。

このような情勢の下で，最近，新しい大学院の構想があちこちから出されるようになって来ました。その基になるのが，昭和63年12月に大学審議会から文部省に答申された「大学院制度の弾力化について」です。その骨子は次の4点です。1）博士課程の目的を，研究者以外の高度に専門的な業務に従事する者の養成にも広げる。2）大学院に社会人を積極的に受け入れる。3）個々の学生の業績に着目して修業年限を大幅に短縮させる。4）独立大学院や独立研究科の設置を促進する。

この方針に従って文部省では，本格的な独立大学院の創設を現在進めています。北陸と奈良の2つの先端科学技術大学院大学が，1～2年先には学生募集を始めることになりました。ここでは，「先端科学技術分野における高度の基礎研究を推進すると共に，大学等の研究者の養成のみならず，企業等において先端科学技術分野の研究開発等を担う研究者技術者等の組織的な養成及び再教育を行う」ことを目的としています。また，本学工学部においても大学院問題検討委員会が中心になって，新大学院構想の検討が勢力的に進められています。その内容についてここで説明することは出来ませんが，学際的に研究教育を行う協力体制を確保すると共に，科学技術の急速な進歩に柔軟に対応して行こうというのが目的です。最近の毎日新聞（6月23日）に，東大先端科学技術研究センターの新大学院構想が掲載されていました。先端研は3年前に新設された，時代の申し子のような研究所ですが，さらに積極的に産学協同路線を進めていくように見えます。企業で立派な研究業績をあげていれば，修士，博士ともにそれぞれ1年で得ることができるように，新聞記事には紹介されています。

大学院の優秀な学生があまり博士課程に進むことを好まず，企業に流れていくという現状の中で，特に，私どものような研究所にあっては学部学生を原則的には持たず，しかも大学院学生定員が学部よりも少ないというという悪条件があります。したがって，このような大学院の新しい動きに積極的に対処する必要があります。しかしながら，新しい大学院構想が実施されていくためには，なお多くの問題が横たわっています。それらの解決のためには，私たちの努力は当然ながら，社会全体の理解，特に企業関係者の長期的な展望からくる積極的な協力が望まれます。

*福井俊郎（Toshio FUKUI），大阪大学産業科学研究所，教授・所長，理学博士，生化学